

# 没理想論争における鷗外とE・V・ハルトマン

坂井健

## はじめに

没理想論争における鷗外がハルトマン美学によって論を展開したことは、よく知られており、また鷗外自身も論争中に述べていることである。そして、鷗外とハルトマンとの関係についても、少なからぬ論考がある。<sup>(注1)</sup>しかしながら、没理想論争における鷗外の論とハルトマン美学との関係についての具体的・個別的な解明は十分になされていないように思われる。大体において、ハルトマン美学は鷗外の理想主義的・浪漫的批評の理論的基盤であったとするのが、従来の定説であろう。

もちろん、そうした側面も真実であるが、以下に見て行くことから分かるように、鷗外がイデーの实在を力説し、理想主義的な立場から逍遙を批判したのは、逍遙の「没理想」を無理想であると考えていた時までであり、「没理想」が無理想ではなく、むしろ大理想とでもいふべきものであり、逍遙もイデーの存在を否定している訳ではないということが明らかとなつてからは、論争の様子は一変したのである。この後鷗外の批判は、もっぱら逍遙の老荘的あるいは

仏教的世界観とそれに由来する発想に向けられるようになる。<sup>(注2)</sup>実は、この対立こそが没理想論争の実相であつたわけだが、<sup>(注3)</sup>本稿の目的は、以上のような没理想論争における鷗外の論の基盤を具体的にハルトマン美学の中に見出し、論争における対立の様相を明確に示すことにある。

## (1)

本論に入る前に、論争における鷗外の論を簡単に追つて以下のごとくである。

まず、初めに鷗外は、「山房論文／其一 逍遙子の新作十二番中既発四番合評、梅花詞集評及粹神子(読売新聞)」(明治24・9・24「しがらみ草紙」24号)において、逍遙の「小説三派」(明治23・12・7～15「読売新聞」)に対する批判を中心に論を展開する。逍遙のいう「固有派」、「折衷派」、「人間派」の分類は、ハルトマンの分類でいう「類想」、「個想」、「小天地想」に相当する。逍遙はこれら三者には優劣がないとしているが、ハルトマンによれば、「類想」・「個想」・「小天地想」の順で、抽象的なものから具象的なものに向

かつて美の階級が進むものであるから、当然、「小天地想」、すなわち「人間派」こそが最も優れたものでなければならぬ。そして、批評には標準（理想・審美的観念）が不可欠だと主張した。

これは抽象的美を排して、具象的な美を上位に置き（第一点）、また、イデーの实在を想定した（第二点）ハルトマン美学の反映である。

次いで、「山房論文」其七 早稲田文学の没理想」（明治24・12・25「しがらみ草紙」27号）では、逍遙は「シェークスピア脚本評註緒言」（明治24・10・20「早稲田大学」創刊号）において、「造化」の本体はあらゆる思想を包括し、あらゆる差別を持たない「没理想」であって、シェークスピアの作品が優れているのは、「没理想」の作だからであると主張し、さらに「我にあらざして汝にあり」（明治24・11・15「同」）において、「小理想」によって議論を語るのではなく、「記実」を行なうべきであるとした。これに対し、鷗外は、「世界はひとり実のみならず、また想のみちみちた」ものであり、シェークスピアの作品が優れているのは、その想が「没理想」だからではなく、「小天地想」であるからであり、人が美を感じるのには耳目によって感覺するからではなく、「先天の理想」が「暗中より踊り出で、此声美なり、この色美なりと叫ぶ」からであると説き、このように美が審美的観念によってその客観性が保証される以上、そのような「理想」による議論は排せられるべきではなく、したがって、「記実」のみでは不十分だとした。

これもまたイデーの实在を前提とした論である。（第二点に同じ）。以上は、従来も指摘されてきたハルトマン美学の理想主義的側面が鷗外の論に反映した点である。

ところが「山房論文」其十一 早稲田文学の没却理想」、「其一二

逍遙子と鳥有先生と」（明治25・3・25「しがらみ草紙」30号）になると、様相が違ってくる。これは逍遙が「没理想の語義を弁す」（明治25・1・30「早稲田文学」8号）、「鳥有先生に答ふ」其一、其二（明治25・2・15「早稲田文学」9号）、「鳥有先生に答ふ」其三、「其意は違へり」（明治25・2・29「早稲田文学」10号）において、「没理想」は無理想ではなく、あらゆる理想を掩い尽くす空であり、あらゆる矛盾律が働かない無限無底の絶対であって、このような「没理想」に達するには「一理想を固執する欲無限の我を去って、無限の絶対到達せんとする欲無限の我を立て」なければならぬと説き、「談理」を「記実」より後にすべきである、としたことに対しての鷗外の反論である。すなわち、鷗外は「衆理想皆是にして皆非」とする矛盾律の無視を攻撃し、このような矛盾律の無視が行われるのは、空間を脱し、時間を離れた「絶対の地位」で「弁証」をする場合であると看破してこれを退け、現象世界の中で帰納的方法によって理想を着々と追い求めるべきであって、釈迦のように悟りを開くことによってひとつかみにするべきものではないと主張したのである。

これは矛盾律を無視せず、弁証法を採用しなかったもので、帰納的方法を重視したものであり、（第三点）、現象世界を離れた絶対の境に实在を想定するという二元論を否定し、現象への認識を深めることで实在に達し得るという一元論の立場に立ったものである。（第四点）これもハルトマン美学に拠るものである。<sup>(4)</sup>

論争はさらに続くのであるが、論争の展開を逐一記述することが本稿の主旨ではないので、省略することに<sup>(注5)</sup>する。

次の節では、ハルトマンの美学について見ながら、以上に述べた四点について確認して行くことにする。

初めにハルトマン哲学について概観する。ハルトマンの美学は彼の哲学の上に立っているのであって、概略を捉えておく方が好都合だからである。

ハルトマンの哲学は彼自身によって超絶的リアリズムと名付けられた。それは、彼は自己の哲学において、可能な限りの広範囲な経験の基盤から、帰納的手段によって、経験を越えた所に存在するなものかについての知識に達すると主張したからである。我々の持つある種の意識、すなわち、認識の意識は、我々が同意しようがしまいが、そして、しばしば我々の欲望に反して、発し、変化し、帰結する。したがって、認識の意識は自我のみから発するものとしては十分に説明出来ない。そこで、経験を越えた実体の存在が仮定されねばならなくなる。そのうえ、この実体は意識の上に作用する。しかも、さまざまな様式で、さまざまな時間に作用するので、この実体は、こうしたふるまいを可能にするような実体に帰せられる以上のような性質を持つものでなければならぬ。このようにして、偶発的な災難は、主観的なイデーの世界を客観的な実在の世界と結び付ける輪とされる。残りの経験、特に本能、自発的な行ない、性的な愛情、芸術的な作品といったようなものについて考察するならば、無意識ではあるが目的を持った意志とイデーがあらゆるところで働いており、隠れている力の一つであって、多くのものではない、ということが明らかになる。この実在の中の実在は無意識者と呼ばれるのが適当だろう。これは二つの等しく根源的な特性を持つ

ている。つまり、意志とイデーである。ヘーゲルもショーペンハウアーもいずれか一方が他に従属するとした点で誤っている。それどころか、どちらもそれだけでは作用しないし、どちらも一方の結果ではない。意志は非論理的であって、実在を引き起こす(世界の Das)。イデーは意識的ではないが、論理的であり、本質を決定する (Was)。意志の果てることのない無益な苦しみは世界を苦しみに満ちたものとするを余儀なくし、世界はそれ以上悲惨になり得ぬほどに悲惨である。しかしながら、世界は、また、非常に素晴らしい世界としても性格付けられる。なぜなら、自然と歴史とは世界の目的に最もよく適った様式で、不断に発展して行くものだからである。そして、意識を増大させることによって、イデーは、永遠に向かう苦しみを引き伸ばすかわりに、非存在における存在の悪からの避難所を与えるのである。<sup>(注6)</sup>

以上から、いくつかがことが分かるであろう。

第一に、ハルトマンは世界の実在の根源として「無意識者」というものを立てている。(ヘーゲルでは「神」、ショーペンハウアーでは「盲目の生への意志」とされている。)これは現象世界を超越したところに存在する、形而上的な世界の根源の存在を認める実在論の立場である。

次に、世界観であるが、この三者は、世界はある一つの世界の実在の根源から生まれて来たのだとする一元的な立場に立っている。この考え方は、逍遙の本質的実在である没理想が現象世界と全く隔絶したところに措定されたことと鋭く対立する。

さて、これに伴って、世界の実在の根源の認識の方法について述

べる。ハルトマンにおいては現象世界と本質的實在の世界は隔絶したものと捉えられていない。それ故、「可能な限りの広範囲な経験の基盤から、帰納的手段によって、経験を越えた所に存在するなにかについての知識に達する」とあるように、経験から帰納的手段によって、形而上的な世界の實在の根源に達することができる。

以上は前節で述べた第三点、四点に相当するであろう。

ところで、ここでハルトマンの独自性について一言触れて置くのも決して無駄ではあるまい。

もし、實在をヘーゲルのように、論理的合目的のら神のイデーと仮定するならば、この世に存在する苦しみ、不幸といったものが説理的非合目的な盲目の生への意志であると仮定するならば、この世に存在する我々の意志に適ったできごと、本能に適ったもの、芸術作品といった存在が説明できなくなるであろうから、世界の實在の根源たる無意識者はこれらの両方を兼備えたものでなければならぬ。このようにハルトマンの独自性は現実と理想とに等しく重点を置いて考えた点にある。これは一種折衷主義といわれても仕方のない側面であるが、こうした側面は先にあげた「可能な限りの広範囲な経験の基盤から、帰納的手段によって、経験を越えた所に存在するなにかについての知識に達する」という点にも表れている。すなわち、ハルトマン哲学はドイツ観念論の末期のものであり、自然科学的な要素を巧みに観念論に取り入れたものである。自然科学が進歩し始めた当時において、もはや時代遅れとなっていた従来の観念論をなんとか現実に対応させようとしたものなのであって、そ

れゆえにこそ、科学と両立し得たのであり、科学者たる鵬外が祖述したのであらう。

以上、一言でまとめるなら、ハルトマン哲学の特徴は、科学的手段帰納的方法により、現象世界に対する認識を深めて行くことによって、形而上学的な世界の實在を把握できると考えていたところにある、といえよう。つまりハルトマン哲学は、従来強調される理想的側面と同時に科学的な側面をも合わせ持っていたのである。

### (3)

「審美論」は「美の哲学 (Philosophie des Schönen)」の第一巻「美の概念」(Der Begriff des Schönen)の四百九十ページ中、「冒頭の五十八ページ分の翻訳である。ちなみに、「審美綱領」は、「美の哲学」の第一巻「美の概念」、第二巻「美の所在」(Die Factoren des Schönen)計八百三十六ページ分の梗概で、分量にして十分の一程度になっている。

以下、「審美論」と「審美綱領」をたすけに、「美の哲学」を追いつながらハルトマン美学について見て行く。

鵬外は「前書き」を訳してはいないが、この中でハルトマンは自己の方法について宣言する。

美と欲望、真実、倫理、宗教との比較は、多くの美学者によって、特に弁証法あるいは演繹的方法をとる観念論者たちによって、美の領域に關しての、精神的な生命に隣接するいくつかの領域と美との境界に關しての、さしあたっての指針としてすでになされてきた。しかしながら、私には實際のところ几帳面で堅苦しい帰納

的方法が適當であるように思われる。<sup>(注7)</sup>

ここでは、前節と同様に弁証法的・演繹的方法が否定され、帰納的方法の妥当性が主張されている。これもまた、一節で述べた第三点に相当する。

さて、次に本文に入るが、初めに美の生じ方について見る。

ハルトマンは客観的な事物自体に美が存在するという説、美を感じる主観の中に美が存在するという説を共に退け、美は事物が主体の感覚に働きかけることによって生ずるものであるという伴生説をとる。

客にして実なる術品を觀て、健全なる覺ゆる主の産みたるおぼえの図は美しか、美しからざるか、その美しさはいかばかりなるか、その美しさはいかなるか。そは覺ゆる主、産む主に關するにあらず、そは官の動かされたために生ずる産といふ業のさまに關す〔審美論〕。

正常な認識主体によって、実際に、客観的実在としての芸術作品から生み出された認識の形象が、美であるか、美でないか、どの程度美しいか、どのように美しいか、それは決して認識の形象によるのも、それを生み出している主体によるものでもない。それは、ただ、感覺器官への影響<sup>(注8)</sup>によって引き起こされる生成の方法と様式にのみよるものなのである。

要するに、美感が生ずるかどうかは、われわれがいかに物体を感

じるかという方法と様式にかかっているというのである。

このように、美が主観と客観の関係において生ずるものであるとしたあと、ハルトマンは「美の所在」について次のようにいう。

美は仮象にあり。美は主象にあり。美は想なるものなり。実物には美無し。空氣若しくは顯氣の運動には美無し。唯其想にして客なるものを捕へおかんために、彫刻にては金石という実物を用ひ……〔審美論〕

このように美は仮象の中に存在し、(感覺的仮象の中にも、空想的仮象の中にも存在し得る。)そして、常に理念的な意識内容であるような主観的幻影の中に存在する。そして、現実の空氣の運動やエーテルの運動やエーテルの運動にも、いかなる物体にも存在しない。(美は、このような純粋なる理念として存在し、その現実性というものは、現実<sup>(注9)</sup>に知覚している意識内容の理念的現実性に過ぎない。)そこで、われわれは美を固定し、それによって理念的な現実性の客観性に対するの保証を得ようとする。……

括弧内は鷗外訳に欠けている部分である。この後、「美を現実<sup>(注9)</sup>に固定するつまり、形を持った物に表わしたり、感覺することができようにする方法として、造形による美術と造形によらない詩、音楽があるが、どちらも等しく芸術なのである、という議論が、ハルトマンでは、ホメロスやベートーベンを引いて、鷗外では、応挙や馬琴を引いて続けられている。

それはともかく、ハルトマンによれば、美の所在は仮象である。

「仮象」(Schein)とは感覚的あるいは空想的な主観的幻影(Erschei-  
nung)のうち、理念的な意識内容を現しているものであるといふの  
である。われわれは感覚によつてものを感じとったり、空想をした  
りするとき、頭の中に、あるイメージが浮び上がるのであるが、そ  
の中で理念的意識内容に合致するもの、これを仮象といふのであつ  
て、美はこの仮象の中にあるといふのである。だから、逆にいえ  
ば、仮象は理念的意識内容が具体的なイメージとなつて現われたも  
のであるといつても良いであらう。

以上は客観的な審美的觀念(美の理想・標準)、すなわちイデーの  
實在を想定したものであつて、一節で述べた第二点に相当する。ま  
た、美を固定し、知覚できるようにする方法について述べられてい  
る箇所は第一点にも相当しよう。

第一点については、さらに次のように述べられている。

今の学者は、反應と抽なる義解(概念)の写象(想像)との、美  
を担ふこと能はずして……〔審美論〕

結局、抽象的概念的写象と思维的省察は美の所在たり得ないこと  
が明白なことと見られるに至る。<sup>(注10)</sup>

このように、ハルトマンは美を抽象的な省察、概念には存在し得  
ないものであるとしてゐる。彼は、徹頭徹尾美は具体的なものであ  
るとし、仮象は決して抽象的なものではないと考へてゐた。単に感  
覚的に快いだけのものでもなく、また、われわれの感覚を超えた形

而上的な世界に存在するものでもないと思へてゐたのである。この  
ことは鵬外の審美論を論ずる上できわめて重要である。なぜなら、  
明治二十年初頭においては二葉亭の、学問はイデーの智力による分  
析的究明、美術はイデーの感情による総合的感得である、との主張  
が広く受け入れられていたのであり、学問的真理と芸術的美とが混  
同され、美も抽象的なものの中に求められることが多かつたのであ  
る。(逍遙の「没理想」も真と美との区別をもたないものである。

鵬外はこの点についても逍遙のいう「没理想」は哲學的所見に過ぎ  
ぬのではないかと攻撃している。鵬外は特にこの点について、批  
判的であつた。もちろん、これはハルトマンに拠つたがゆゑのこと  
であらう。なお、ハルトマンが類想を排し、「個想」を重んじたの  
も美を具体的なものと思へたからである。

ところで、前に述べたように、美が生ずる際に主観的要素が関わ  
ることを認めた場合、その客観性がいかにして保証されるかといふ  
ことが問題になつてこよう。この疑問についてハルトマンは次のよ  
うに答へる。

美を受容する時に当りて、よく我を仮象中に投入する所以のもの  
は、仮象の現するところの理想に依りて、能變の唯一の本源たる自  
性と合一するに外ならず。〔審美綱領〕

美に没入すると、主体はこの分離(坂井注・主体と絶対的精神と  
の分離)が統合されたと感じ、現象化した理念である美的仮象を通  
して絶対的精神との一致に回帰する。<sup>(注11)</sup>

つまり、われわれはもともと普遍的な絶対的精神から生まれ出て分化した存在だから、常にその源である絶対的精神に回歸しようとして希求し、絶対的精神にかなったものを求めている。そして、美的対象というのは理念が現象化したものだから、これは絶対精神にかなったものなのである。このようにして、美の普遍性は保証される。

これは、イデーの存在を想定することによって、美の客観性の保証を得ようとするものであるから、第二点に相当し、また、我々が形而上的な存在である絶対精神から分化した存在であって、これから隔絶されたものではないと考えている点は、第四点にも相当しよう。

## むすび

以上見てきたように、ハルトマン美学は一面では理想主義的・浪漫主義的な性格を持っていたが、その反面、科学的・経験主義的な色彩の濃いものでもあった。そして、前者が鵬外をして、逍遙の無理想のように思われた「没理想論」、そして「談理」を排し、「記実」を重んじた態度を攻撃せしめたのであり、後者が鵬外をして、逍遙の現象世界の認識と学問を軽んじ、現象世界を脱却した絶対の境地にあらゆる理想を捨ててしまひあらゆる矛盾を統合してしまふような「没理想」を悟りによって求めようとする老荘的・仏教的な二元論の発想を非難せしめたのであった。

このように没理想論争は東洋的な二元論と西洋的な一元論とが対立したものであったといえる。

注(1) 神田孝夫「鵬外初期の文芸評論」(『比較文学研究』東京大学比較文学会、第四巻第1・2号、一九五七年)同「鵬外と美学」(『福垣

達郎編「森鵬外必携」学燈社)、同「森鵬外とE・V・ハルトマン

——「無意識哲学」を中心に——(『比較文学研究 森鵬外』朝日出版社)、小堀桂一郎「森鵬外——文芸改題 翻訳篇」(岩波書店)、磯貝英夫「鵬外の文学評論——没理想論争を中心に」(福垣達郎編「森鵬外必携」学燈社)、同「啓蒙批評時代の鵬外」(『文学』昭和47

・11、12、48・1)など。

(2) 坂井健「二葉亭四迷「真理」の変容——仏教への傾倒——」(『新潟大学国語国文学会誌』平成元・3)同「二葉亭四迷と坪内逍遙」

(『函館私学紀要——中学・高校編——』函館私学振興協議会、平成元・3)同「坪内逍遙「没理想論」と老荘思想」(『稿本近代文学』1989・11)参照。

(3) 坂井健「没理想論争の真相——観念論者逍遙と経験論者鵬外」(『稿本近代文学』平成元・11)参照。

(4) 二元論・一元論の定義は別稿(『二葉亭四迷「真理」の変容』(注2)・「および」(3)など)で二元論的直観論・一元論的認識論といった語で述べたが、簡単にまとめると以下のごとくである。二元論においては、本質的存在たるイデーは、経験可能な現象世界を離れたところに存在するので、経験的・科学的方法によってはイデーを知ることができない。これに対して、一元論においては、イデーは現象世界に現われているのであり、この世界はイデーが発展・展開して現れたものであるから、現象世界に対しての経験的知識を無限に積み上げるならば、イデーを把握できると考えられる。換言するならば、一元論とは「実」より帰納して「想」を得られるとするものであり、二元論は「実」を脱却することで「想」に達しようとするものである。そして一元論的発想は西洋の近代に特徴的であり、二元論的発想は仏教や老荘思想といった東洋的な発想に顕著である。

(5) 論争全体の展開については重松泰雄「没理想論争」(『解釈と鑑賞』昭和45・6)の概観が分かり易い。

(6) Von Hartmann's philosophy is called by its author a transcendental realism, because in it he professes to reach by means of induction from the broadest possible basis of experience a knowledge of that which lies beyond experience. A certain of consciousness, namely, sense-perception, begins, changes and ends without our consent and often in direct

opposition to our desires. Sense-perception, then, cannot be adequately explained from the ego alone, and the existence of things outside experience must be posited. Moreover, since they act upon consciousness and do so in different times, they must have those qualities assigned to them which would make such action possible. Casualty is thus made the link that connects the subjective world of ideas with the objective world of things. An examination of the rest of experience, especially such phenomena as instinct, voluntary motion, sexual love, artistic production and the like, makes it evident that will and idea, unconscious but teleological, are everywhere operative, and that the underlying force is one and not many. This thing-in-itself may be called the Unconscious. It has two equally original attributes, namely, will and idea. Hegel and Schopenhauer were both wrong in making one of these subordinate to the other; on the contrary, neither can act alone, and neither is the result of the other. The will is illogical and causes the existence, the Das of the world; the idea, though not conscious is logical, and determines the Was. The endless and vain striving of the will necessitates the great preponderance of suffering in the universe, which could not well be more wretched than it is. Nevertheless, it must be characterized as the best possible world, for both nature and history are constantly developing in the manner best adapted to the world-end; and by means of increasing consciousness the idea, instead of prolonging suffering to eternity, provides a refuge from the evils of existence in non-existence. (Encyclopedia Americana 1936)

(7) Der Vergleich der Schönheit mit Bedürfniss, Wahrheit, Sittlichkeit und Religion ist von vielen Aesthetikern, namentlich den dialektisch oder deduktiv verfahrenen Idealisten als vorläufige Orientierung über das Gebiet des Schönen und dessen Abgrenzung von den Nachbargebieten des

geistigen Lebens vorausgesetzt worden; mir scheinen es aber sachlich angemessener und formell dem induktiven Verfahren entsprechend.

(8) Ob das Wahrnehmungsbild, welches von einem normalen Wahrnehmungssubjekt in Gegenwart eines objektiv-realen Kunstwerks produziert wird, schön ist oder nicht, und in welchem Grade und welcher Art es schön ist, das ist gar nicht von dem alles aus sich produzierenden Subject bedingt, sondern ganz allein von der Art und Weise der Produktionstätigkeit, zu welcher es durch die Affection seiner Sinnesorgane angeregt wird.

(9) Das Schöne ist liegt also allemal im Schein, sei es im Sinnen-schein, sei es im Phantasieschein, also immer in der subjektiven Erscheinung, wie idealer Bewusstseinsinhalt ist, und weder in den realen Bewegungen der Luft oder des Aethers noch in irgend welchen Dingen an sich. Das Schöne ist als solches rein ideal, und seine Realität ist nur die ideale Realität eines wirklich perzipierten Bewusstseinsinhalt; sucht man aber nach einer Fixation des Schönen, um dadurch Bürgschaften für die Objektivität dieser idealen Wirklichkeit zu gewinnen.

(10) Es darf nachtrage als unbestritten werden angesehen, dass abstrakte begriffliche Vorstellungen und gedankliche Reflexionen nicht der Sitz des Schön sein können.

(11) In der Hingabe an das Schöne aber fühlt das Subjekt diese Gescheinheit aufgehoben und sich in die Einheit mit dem absoluten Geist durch den ästhetischen Schein der Idee phänomenaliter restituirt.

(本記) 本稿頁一〇三〇・一・一・〇 以下は、たゞ日本美学史の註釋・東北文部研究會同集録の『美意識の心』に於ての譯文也。

(筑波大学博士課程) 文芸・言語研究科 日本文学)